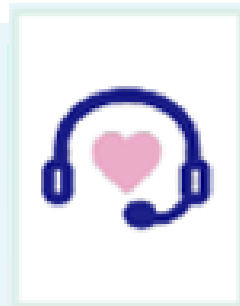




医療の現場アラカルト - Vol.5

スペイン語担当



アイコンタクトの重要性は今でこそよく言われますが、もともと日本文化においては相手をじっと見たり視線を合わせたりすることを避けてきたような気がします。そのうえ医療の現場はとて忙しく、医師はパソコンでカルテを見ながら診察し入力をしていくので、患者さんからすると時には、自分の方をあまり見てくれなかった…と感じる方がおられるというのも実情ではないでしょうか。



外国人の方は、一般的に視線を合わせることを大切にしている傾向があり、中でも私が担当するスペイン語圏の方はとりわけ、「自分を見て欲しい!」という気持ちがとても強い方が多いと感じます。「先生があまり私を見てくれないので、伝えたいことを話そびれてしまった」と診察後に言われたことがあります。また逆に、ある糖尿病の患者さんが「この病気は私の健康管理不足が原因なので恥ずかしい」としょんぼりしているところを、担当の医師が「Ánimo アニモ (元気出して)」と片言のスペイン語とハイタッチで励ましてくれたことで、患者さんは「ガンバリマス!」と表情が一気に明るくなり、私まで感動したこともあります。

患者さんの「先生、私を見て!」と訴えかける熱い視線に、時には同じく熱いまなざしで応えてあげると、言葉が通じない患者さんとのコミュニケーションがもっと豊かになるのでは、と感じています。

「蛇の出る部屋!？」



NHKに「漢字ふむふむ」という番組があります。

同じ漢字を使う国同士ですが、日本と中国とでは時に同じ漢字でも全く意味が異なる場合が少なくありません。先日は来日した中国の人が部屋を借りようとして「蛇口はここ」と言われ、「蛇の出る部屋になって住めない!」と仰天したお話でした。

中国では蛇口のことを「水龍頭」、龍を使って言います。これは龍が水にまつわる霊力を持つ神獣だからで、日本でも寺社の手水鉢には龍の頭から水が出ているのをよく見かけますよね。「蛇口」となったのは水道が普及したばかり、まだ各家庭に水道は引かれておらず街なかにも共用栓があった頃に、その栓に蛇のお腹のような縞模様があったため「蛇口」と呼び始めたことなのです。ちなみにヨーロッパでは、ナイル川の氾濫時期が毎年獅子座の頃だったとかで、よくライオンが使われるそうです。そう言えばシンガポールのマールライオンも派手に水を吐いていますよね(^^)

今月のトピックス



「ツボの話」



「ツボ」というと中国のいわゆる漢方の治療法ですが、石器時代に尖った石が偶然体に当たって痛みが消えることが判り、そんな大昔からすでに石で体を刺激して治療効果を得ようとしたというような壮大な話もあるようです。スペイン語の通訳者から「合谷(手の親指と人差し指の付け根の中間にあるツボ)」は押すと気持ちいいし、ツボにあまり馴染みのない南米の患者さんに紹介して喜ばれたと聞きました。

他に万能のツボと言われるのが「湧泉」です。これは足の裏、母趾球の下の中央部、土踏まずの上あたりのくぼみにあります。古い話になりますが、昔テレビCMで「指圧の心、母ごころ、押せば命の泉湧く」というフレーズがありました。このツボのことを言っているのかも…と想像してしまいました。ゴルフボールを足の下に置いてゴロゴロするといいですよ。

もう一つ、まだまだ寒いこの季節に有効な風邪予防のツボ「風門」があります。背中側、首の付け根のゴリッと大きな骨から指2本分下にあります(脊椎をはさんで両側です)。中国語で風邪は「感冒」という言い方以外に「受了风寒(寒さの邪気を受ける)」と言います。首のこの辺り、冷やさないように気をつけて、風邪に負けないようにしましょう。

